

結果を表す「受動動詞+テアル」構文の 出現様相の分析*

裴銀貞**
ejbae111@bufs.ac.kr

<目次>

- | | |
|-------------------|----------------------|
| 1. はじめに | 3. 例文の分析 |
| 2. 先行研究の検討及び問題の提起 | 3.1. 用法の再分類 |
| 2.1 先行研究の検討 | 3.2 出現様相におけるチェックポイント |
| 2.2 問題の提起 | 3.3 調査の結果 |
| | 4. まとめ |

主題語: 結果相(resultant)、受動動詞(passive verb)、出現様相(Emergence aspect)、主語の性(Characteristics of subjects)、対象変化動詞(A verb with a change of object)、位置(location)、存在(existence)

1. はじめに

本研究は、以下のような結果相を表す「他動詞受動動詞+テアル」構文を主な考察対象とし、本構文の用法上の分類を洗い出すと同時に、その出現根拠について明確にすることを目的とする。

- (1) 上部にはシデ、カミシバが挿されており、裏面に「鬼」の逆文字が書かれてある。この的の前には祭壇が設けられ…。(Yahoo!ブログ/Yahoo!サービス/Yahoo!ブログ Yahoo!ブログ Yahoo! 2008)
- (2) 彼が行った時には大型観光バスが道路脇の駐車場に二台停められてあった。(彼岸祥風 白井基也著 東京図書出版会;星雲社(発売)、2002)
- (3) 円の外側には、百目ろうそくが何本も置かれてある。(黒魔術の女 長編推理小説 森村誠一著 光文社、1989)

* 이 논문은 2017년 대한민국 교육부와 한국연구재단의 지원을 받아 수행된 연구임 (NRF-2017S1A5A2A01023457)

**釜山外國語大學校 日本語創意融合學部 教授

「Aガ+ラレテアル」の格パターンを取る「受動動詞+テアル」構文は、主語である対象名詞「A」の状態の描写する結果相の解釈を表し、同じく、対象の結果状態を表せる以下の三つの構文との類似性が認められる。

ドアが閉めてある	- ドアが閉まっている	- ドアが閉められている
「他動詞+テアル」	「自動詞+テイル」	「他動詞受動動詞+テイル」

しかし、先行研究では、同じく結果相を表せる構文でありながらも、上記の三つのパターンに比べ、「受動動詞+テアル」構文の研究は殆んど見当たらない。益岡(1984)、森田(1994)によると、「受動動詞+テアル」構文は、対象名詞の結果様相のうち、「存在」の意味合いが認められる際、用いられ得る構文ではあるものの、「他動詞+テアル」構文に比べ、不自然であり、落ち着きの悪い構文であると指摘されてきた。

そのため、従来、結果相を表せる構文として殆んど注目されたことがなく、関連研究も少ない。しかし、実例を見てみると、不自然な表現とされながらも多数の例文が用いられていることがわかる。

もっと興味深いことに、「受動動詞+テアル」構文がこのように幅広く用いられているにもかかわらず、この例文を提示した際、韓国人日本語学習者の7割以上が該当の構文を非文として判断していることである。

実際、韓国語日本語学習者にこのような傾向が見ら得る理由は、「受動動詞+テアル」構文が結果相を表せる表現であるにもかかわらず、先行研究で皆無に近いほど注目されてこなかったためである。実際、使用上に問題のない表現が、日本語教育の現場で非文扱いされることがこれ以上続いてはいけないと判断される。また、日本語学習者に見られるこのような誤解は是正される必要がある。

そのため本研究では、実例で用いられている「受動動詞+テアル」構文を対象に、用法をいくつかのタイプに分類すると同時に、その用法ごとに、該当構文がどのような出現様相を見せているのかについて考察したい。実際、結果相を表すアスペクト構文は上述したように「他動詞+テアル」「自動詞+テイル」「受動動詞+テアル」構文は勿論、「受動動詞+テアル」構文など、複数で存在しており、その意味的多様性により微妙に使い分けられている。

1) 結果相を表す構文のうち、先行研究でもっとも活発な研究が行われているのは、「自動詞+テイル」文と「他動詞+テアル」文との比較分析、または「他動詞+テアル」文の特徴分析である。

そのため、日本語学習者にとって分かりにくく、誤用発生の頻度の多い表現とされている。本研究を通し、「受動動詞+テアル」構文の意味的特徴及び出現様相が明確になれば、日本語教育の分野において本研究の成果が、大きく活用できると期待できる。

2. 先行研究の検討及び問題の提起

2.1 先行研究の検討

従来、「テアル」構文に関する先行研究のうち、もっとも活発な研究が行われてきたのは「能動動詞+テアル」構文である。主な研究として、森田(1977), 益岡(1984, 1987), 杉村(1996, 2002), 寺村(1984), 山崎(1992), 崔(1992), 原沢(1998, 1999, 2005), 鈴木(2002, 2004), 李(2001), 森(2001), 浦木(2006, 2010) 神永(2008), 金水(2009), 斎藤(2009), 呉(2012) などがあり、30年前から最近に至る前、絶え間なく注目されてきた。

しかし、本研究で考察対象としている「受動動詞+テアル」構文に関する研究はごく少なく、益岡(1984), 森田(1994), 森(2001)などにとどまっている。本章では数少ないものの、「受動動詞+テアル」構文の特徴について記述している先行研究の内容を概観し、その問題点について注目してみたい。

2.1.1 森田(1994)

森田(1994)では、「受動動詞+テアル」構文は、現代の文章感覚からすると落ち着きが悪く、不自然なニュアンスを与える例文が殆んどである、と指摘しながら、該当構文は「無情物主語の受身文」である故、不自然なニュアンスを有するようになったと触れている。

- (4) 本箱の上には支那の**人形等**があまり構われずに置かれてありました。
- (5) **勳章**がいかにも荘重な感じで飾られてあった。

森田(1994)では、上記例文(4)(5)を取りあげながら、意志動詞「置く」「飾る」を述語とするなら、能動構文である「他動詞+テアル」型がもっとも適しており、「受動動詞+テアル」型は不自然であると主張している。しかし、このような氏の主張は次のような側面から見直しの余地がある。

まず、「他動詞+テアル」構文が能動構造を取っていると見なしているところである。実際、「他動詞+テアル」構文は、レル・ラレル助動詞が用いられる受動形式をとってはいないものの、主語として物名詞が位置し、その物名詞の状態を描写する構文として用いられる、确实とした「受動型構造」をとっている構文であるからである²⁾。

次の問題点は、無情物が主語に位置するタイプの受身文を一律に不自然であると判断している点である。普通、結果相という事態は、動作主が行った行為自体がすでに終結し、その以降の状態を問題とする構文であるため、動作主が誰なのか確定しにくく、動作主を主語とする形の能動構造の文ができない構文も多く存在する。すなわち、誰なのか確定できず、能動文の形で表すことができないため、その代わりに受身文として現れ

2.1.2 益岡(1984)

益岡(1984)では「他動詞+テアル」構文を次のように4分類すると同時に、このうち、A1型に限り「受動動詞+テアル」構文として出現できると主張しながら、「受動動詞+テアル」構文の存在に関し、触れている。

<「テアル」構文の分類>

- ① A-1型: 行為の結果もたらされる、ある場所での対象の存在を描写するタイプの文
(例) 鞆が置いてある、荷物が乗せてある など
- ② A-2型: 行為の結果もたらされる、受動者の状態が目に見える形で存続していることを描写するタイプの文 (例) 石が磨いてある、紙が折ってある など
- ③ B-1型: 行為の結果もたらされる事態が基準時において引き続き存在しているという「結果の事態の継続性」の意味を表すタイプの文
(例) 部屋を確保してある 荷物をホテルに残してある など
- ④ B-2型: 単に、行為の結果が基準時において何らかの有効性を示す文
(例) 予約は入れてある、準備はしてある など

益岡(1984)では、「受動動詞+テアル」文の場合、対象の位置を強調する特徴があるため、「テアル」構文の上記の四つの用法のうち、該当「場所」における存在を描写するタイプである「A-1」型の形では出現できると主張している。しかし、実例を見てみると、下記例文

2) 実際、「他動詞+テアル」構文は結果相を表す「テアル」の用法以外、「私は数日前からパーティーの準備をしてある」のように、準備状況、効力の用法も存在する。後者の用法は、動作主が主語として用いられる構造であるため、能動構造を取ると言える。すなわち、「他動詞+テアル」構文は、結果相を表す用法は「受動構造」を、準備状況を表す用法は「能動構造」を表すと判断するのが正しい。

(6)-(7)のように、「A-2」型でありながら、しかも対象の位置を強調する文脈でもないのに、「受動動詞+テアル」の形として出現していることがわかる。すなわち、A-1型のタイプしか「受動動詞+テアル」構文をとらない、といった氏の主張は問題があることがわかる。

- (6) なんだ、これはあと、思ったが、つまりポルノ映画のもっとも重要な部分は、カットされてあるのだ。(歴史 中東入門書「知らなかったこと」「知りたかったこと」すべてがわかるミスター・パートナー海外取材班編 新潮社、2002)
- (7) 「その研修には効果がある。日常から隔離されてある問題を徹底的に議論したのだから、それはプラスだ」というふうに書ける。(総記 本気ではじめる大人の勉強法 毎日が楽しくなる 西山昭彦著 中経出版、2004)

2.1.3 森(2001)

森田(1994)、益男(1984)などでは、「受動動詞+テアル」構文に関する研究を、「テアル」構文の研究の、ごく一部として扱ってなかったとすれば、この構文を本格的に研究の対象として注目したのは、森(2001)がほぼ初めてであると言える。森(2001)では、不自然な表現とされながらも、「受動動詞+テアル」構文が許容される条件について考察を行った。

氏は、対象の位置を強調する「A-1型」テアル構文に限り、「受動動詞+テアル」構文の形が許容されるといった益岡(1984)の主張を検証するため、「テアル」構文の四つの用法が実際、「受動動詞+テアル」型の形をとることができるのかについて分析した。

その結果、対象の位置を強調するA-1型「テアル」文は勿論、「~テアル」の「アル」が<存在>として解釈されさえすれば、形を問わずいずれも「受動動詞+テアル」構文として出現できると主張した。該当の例として、下記例文を取り上げている。

- (8) 病院からは「初産は5分間隔になってから、しっかり痛んでから」って言われてあるので、まだ待つしかない。
→ **B-2型テアル構文**：「初産部である私は、~って言われている状況下で存在する」という意味なので「受動動詞+テアル」構文が可能であると主張。
- (9) 今日は職場のロクデナシ仲間に00の馬券を買うように頼まれてあった。
→ **B-2型テアル構文**：「私は~とうに頼まれている状況下に存在した」という意味なので「受動動詞+テアル」構文が可能であると主張。

ところが、このような森(2001)の主張は、「受動動詞+テアル」文の許容条件を一律に「存

在・位置の強調」としてしか判断していないため、解釈上、問題を引き起こせる可能性が生じる。実際、上記例文(8)(9)のように、該当の文の主語が「人」である場合は、「人がある状態として存在する」という、「存在」を強調するための文であるという解釈はどうしても無理がある。むしろ、主語がある状態として「存在する」という解釈よりは、ある状態が持続しているといった「効力」の解釈がずっと自然な例文なのである。

例えば、森(2001)では、例文(8)が成立する理由を、「初産である私は病院から、初産は5分間隔になってから、しっかり痛んでから」と聞いた状態でここに存在している」という解釈が可能であるため、「受動動詞+テアル」構文として成立した、と主張している。しかし、実際、そのような解釈より、「初産である私は以前、病院から初産は5分間隔になってから、しっかり痛んでから」ということを聞き、その事実を今も認知している」という「事実の効力」として解釈することがずっと合理的である。

すなわち、森(2001)の場合、「受動動詞+テイル」構文が許容される理由をいずれも「位置」の強調及び「存在」の強調という基準に当てはめようとしたため、この基準に合っていない例文の解釈に問題を引き起こしたと判断される。

2.2 問題の提起

以上、「受動動詞+テイル」構文に関するいくつかの先行研究の内容を概観した。その結果、「能動動詞+テアル」構文に関する膨大な先行研究の量に比べ、「受動動詞+テイル」構文に関する先行研究はごく少ないことがわかった。特に、「受動動詞+テイル」構文に焦点を当てている唯一な論文と言える森(2001)の場合さえ、その成立条件が全ての例文に当てはまらない難点があることがわかった。

特に問題であると考えられるのは、次のような「受動動詞+テイル」構文の用法の分類である。森(2001)の場合、「存在」の意味さえ認められれば「受動動詞+テイル」構文は成立すると主張し、「受身動詞+テイル」の使用根拠をむりやり「存在」の意味に帰結しようとするところに問題があった。ところで、氏の主張には、次のような問題も見られる。それは、「受動動詞+テイル」構文の用法分類を、益岡(1984)と同様に、以下に示すようにA-1型、A-2型、B-1型、B-2型に四つに分けているところである。

※ 参考

<A-1型>

- ・ 何気なく手に取り、その箱に貼られてあるレッテルを見て唖然としてしまった。 <物主語>

<A-2型>

- ・ まだ電灯も来ないある家の二階は、もう戸が鎖されてあるのを見た。 <物主語>

<B-1型>

- ・ 私が行ったランチタイムは4種類のカレーが選ばれてあった。 <物(対象)主語>

<B-2型>

- ・ 今日もいつものように見てみると、次のような言葉が送られてあった。 <物(対象)主語>
- ・ 病院からは「初産は5分間隔になってから、しっかり痛んでから」って言われてあるので、まだ待つしかない。 <人(対象)主語>

そもそも、益岡(1984)の言う「能動動詞+テアル」構文の分類は、対象となる物名詞が主語となるAタイプ「AがVテアル」と、動作主である人名詞が主語となるBタイプ「(B:動作主)AヲVテアル」に分けられる。すなわち、Aタイプは受動構造、Bタイプは能動構造を持っていると言える。

しかし、森(2001)で考察対象としている「受動動詞+テイル」構文は、「受動動詞」のみを述語とするため、動作主である人名詞が主語となるタイプ自体が存在できない。すなわち、益岡(1984)の言う四つの分類をそのまま「受動動詞+テイル」構文に適用することは不可能であり、益岡(1984)におけるB型例文と森(2001)におけるB型例文は結局、同じタイプの例文になること自体ができない。

すなわち、根本から異なる「能動動詞+テアル」構文と「受動動詞+テイル」構文を同等に扱い、「能動動詞+テアル」の分類法を「受動動詞+テイル」構文にそのまま適用しようとした森(2001)の主張は問題があると判断される。

特に森(2001)では、A-1型であれB-2型であれ、「存在」の意味さえ認められれば「受身動詞+テアル」構文は成立すると主張している。それと同時に、上述した<※参考>の例文を取り上げながら、いずれも「存在」の意味が認められるため、A-1型でなくても、「受身動詞+テアル」構文が成立すると記述している。

しかし、実際、森(2001)で言っているB-1とB-2は、受動構造を持っている例文であるため、益岡(1984)で言っているB-1とB-2の例文とは本質が違う。このように本質が異なる例文を照らし合わせながら、許容条件の違いを論じていること自体に問題がある。

つまり、「受動動詞+テイル」構文の許容条件及び、出現条件を論じる際には、「能動動詞

+テアル」構文の用法分類とは異なる、独自の基準をもとに、用法分類を再検討する必要があると判断される。

3. 例文の分析

本研究では、「受身動詞+テアル」構文の用法分類を、森(2001)とは異なる形で行うと同時に、それぞれのタイプが実例として出現している様相を綿密に分析したい。ここでは、KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス(以下、BCCW)」で用いられている「受身動詞+テアル」構文609の例を対象とし、「受身動詞+テアル」構文の類型別再分類を試みる。

また、新しい基準で用法分類を行った後、実例として用いられる「受身動詞+テアル」の例文がどのようなタイプとして出現しているのかを分析する。類型別ごどのようなタイプとして出現しやすいのか、また、出現様相に独特な傾向は見られないのか、ということに注目し、今までとはまったく異なる時点から「受身動詞+テアル」の出現様相及び、出現根拠を洗い出すことにしたい。

3.1 用法の再分類

本研究では、実例として用いられている「受身動詞+テアル」の例文609例の分析結果に基づき、この構文を以下のような三つのタイプとして分類し、タイプ別出現様相について触れることにしたい。

ちなみに、「能動動詞+テアル」構文の場合、主語の位置に対象名詞が据えられる受動構造の「A-1型」「A-2型」があり、動作主が主語となる能動構造の「B-1」「B-2」が存在する。しかし、「受身動詞+テアル」構文は対象名詞のみが主語として用いられるため、全てが受動構造を取っている。そのため、「受身動詞+テアル」構文は、全て受動構造をとる次のように三つのタイプに分類される。

「Aタイプ」: 行為の結果もたらされる、ある場所での受動者・対象の存在を描写するタイプの文
<益岡(1984)、森(2001)における「A-1型」に当たるタイプ>

(10) 円の外側には百目ろうそくが何本も置かれてある。(文学 黒魔術の女 長編推理小説 森村

誠一著 光文社、1989)

「Bタイプ」: 行為の結果もたらされる、受動者・対象の状態が目に見える形で存続していることを描写するタイプの文<益岡(1984)、森(2001)における「A-2型」に当たるタイプ>

- (11) 目のやり場に彼はこまり、瞳を彼女の横へ向けて、たたまれてあるスカートや下着、その上に重ねられたネックレスやイヤリングを見下ろした。

(文学 ママたちの性教育 斎藤晃司著 マドンナ社;二見書房(発売)、2004)

「Cタイプ」: 行為の結果もたらされる、受動者・対象の状態が目に見えない形で持続していることを表すタイプの文

- (12) しかしさすが元委員長のI氏のメニューだけあってよく考えられてあり、参考になる点が多い。(Yahoo!ブログ/家庭と住まい/家庭 Yahoo!ブログ Yahoo! 2008)

まず、「受身動詞+テアル」構文の「Aタイプ」として分類される例文から見ると、行為の結果もたらされる、ある場所での受動者・対象の存在を描写するタイプの文であり、益岡(1984)、森(2001)における「能動動詞+テアル」構文の「A-1型」に当たるタイプである。ちなみに、益岡(1984)では「A-1型」に限り、「受身動詞+テアル」構文の形が許容されると指摘した。

次に、「Bタイプ」として分類される例文は、行為の結果もたらされる、受動者・対象の状態が目に見える形で存続していることを描写するタイプの文であり、益岡(1984)、森(2001)における「能動動詞+テアル」構文の「A-2型」に当たるタイプである。このタイプも、対象名詞が主語の位置に据えられる受動構造の文であるため、同じく受動構造を有する「能動動詞+テアル」構文の「A-2型」と同様な性質を持つ。

上記の「Aタイプ」に属する例文が、対象名詞の「変化した状態」よりは「存在する位置」に注目し構文であるとするれば、この「Bタイプ」の例文は、対象名詞の「変化した状態」に注目する構文であると言える。そのため、主に対象変化動詞類が述語として多用される特徴がある。

そして、「Cタイプ」であるが、このタイプに属する例文は、行為の結果もたらされる、受動者・対象の状態が<目に見えない形>で持続していることを表すタイプの文である。ちなみに、益岡(1984)、森(2001)では、このようなタイプについては触れていない。触れてい

ないというのは、言い換えると「能動動詞+テアル」構文において、「受動者・対象の状態が <目に見えない形>で持続していることを表すタイプの文」自体が存在していないことを意味する。

位置の変化や状態の変化を強調する「Aタイプ」と「Bタイプ」とは違って、この「Cタイプ」は対象が主語となる受動構造を持ちながら、位置や状態の目に見える形の変化は伴わない。すなわち、述語として対象非変化動詞類をとる特徴がある。例えば、例文(12)を見ると、「動作主が I 氏のメニューを入念に考え、メニューにそのような配慮が感じられる」ということを意味する。メニューの位置を強調する意味合いもなければ、メニューの変化された状態が目に見える形で持続している構文でもない。

後述するが、対象となる物名詞の位置や状態変化が目に見えない形で持続するというタイプ C は、受動動詞+テアル構文ならではの独特な類型であると言える。

3.2 出現様相におけるチェックポイント

本稿では、新たな基準から分類された「受動動詞+テアル」構文の出現様相を分析していくが、その過程において特に重点を置きたいところは、以下の二点である。

- 1) 「受動動詞+テアル」構文は、該当位置における存在の意味さえあれば出現するのか。
- 2) 「受動動詞+テアル」構文の出現根拠は、前後文脈の影響があるのではないのか。

まず、1)であるが、前述したように森(2001)では「~テアル」の「アル」が <存在>として解釈されさえすれば、形を問わず「受動動詞+テアル」構文として出現できると主張した。本稿ではそれを検証するため、A型-C型までの三つのタイプごとの出現状況を詳細に調べ、出現条件として「存在の意味の有無」が必須なのかについて検証する。

次に、2)であるが、「受動動詞+テアル」構文の出現根拠に、前後文脈の影響はないのかということについても注目したい。

実際、結果相を表せる表現として、本稿の考察対象である「受動動詞+テアル」構文の他、「自動詞+テイル」、「他動詞+テアル」、「受動動詞+テイル」などの複数の表現がある。本稿では、「受動動詞+テアル」構文の出現背景に、前後文脈に、これらの<結果相を表せる他の表現>の共起有無が関わっているのかについて検証したい。

主知のごとく、日本語は繰り返しを避けようとする特徴を持つ言語である。それだけ

に、同じ結果相を表せる場面において、前後文脈に同じ型の結果相表現が繰り返し用いられていることは好まれない。例えば、ある文脈において結果相を表す表現いくつか連続する文脈があると仮定しよう。もし、「自動詞+テイル」、「他動詞+テアル」、「受動動詞+テイル」などがすでに用いられているのなら、それとの繰り返しを避けるために、「受動動詞+テアル」構文が、その代わりに出現している可能性も十分あり得る。

本研究ではそれを念頭に置き、グループごとに「受動動詞+テアル」構文の出現様相を調べるとき、前後文脈に用いられる結果相の表現の使用環境も一緒に確認することにした。

3.3 調査の結果

BCCWで収集した「受身動詞+テアル」の609例を収集し、タイプ別に分類し、その出現様相を調べた結果は以下、調査結果[1]~[3]にまとめられる。

調査結果[1] 「能動動詞+テアル構文」にはない、タイプC型テアル構文が存在しており、数的には、タイプA>タイプB>タイプCの順で用いられている。

まず、調査の結果、「受身動詞+テアル」構文は「能動動詞+テアル」構文と違って、行為の結果もたらされる、受動者・対象の状態が目に見えない形で持続する「タイプC」が少数ではあるが存在していることがわかった。下記の<表1>を見られたい。

<表1> 「受身動詞+テアル」構文における、タイプ別使用の数

タイプ	タイプA	タイプB	タイプC	合計
数	501例 (82.3%)	76例 (12.5%)	32例 (5.3%)	609例

「タイプC」は、総例文609例のうち、5.3%に当たる少数ではあるものの、32例用いられていた。「タイプC」の例文は、下記例文(13)、(14)のようなものがある。

- (13) それぞれの時代に、またそれぞれの地域に性にまつわる固有の民俗が営まれてあったことを認めることなしには、真澄の残してくれたドキュメント=記録に向かい合うこと…。(赤坂 憲雄著) 1950 男 書籍2 歴史 日本のこころ 私の好きな人 風の巻 長部日 出雄ほか著 講談社、2001)

- (14) チベット問題がどのような行方をたどろうとも、彼らの未来は常に神々にはたらきかけられてあるのであろう。(野村正次郎(著) 男 書籍3 社会科学 チベットを知るための50章 石濱裕美子編著 明石書店、2004)

前述したように、「能動動詞+テアル」構文には、対象の変化が目に見えない形として持続する「タイプC」は存在していない。しかし、「受身動詞+テアル」構文の場合、「能動動詞+テアル」構文のA-1型とA-2型に該当するタイプであるAとタイプBが存在する他、「能動動詞+テアル」構文には見られなかったタイプCが存在し、主語となる対象名詞の結果状態の持続を、より幅広く現れる特徴があることが確認できた。すなわち、「受身動詞+テアル」構文は、既存の能動動詞+テアル構文に比べ、受動構造をとる「テアル」構文に特化された結果相表現であると言える。

従来、不自然であると言われながらも実例でかなりの「受身動詞+テアル」構文が見られたが、「能動動詞+テアル」構文では伝えきれない、「受身動詞+テアル」構文ならではの意味特徴があったことが、「受身動詞+テアル」構文の出現根拠を一つを提供したのではないかと考えられる。

次に、「受身動詞+テアル」構文の用法別出現数を見ると、<表1>で確認できるように、行為の結果もたらされる、ある場所での受動者・対象の存在を描写するタイプの「タイプA」がもっとも多いことがわかる。

益岡(1984)で、「受動動詞+テアル」文は、ある「場所」における存在を描写するタイプに限って出現できると主張していたが、実際、そのタイプだけで出現しているわけではなかったものの、例文の8割以上が<ある「場所」における存在を描写するタイプ>の形として出現していることが確認された。

調査結果[2] 位置節を伴う割合や主語の位置に据えられる名詞の特徴、状態変化を強調する表現の使用などの特徴が、タイプごとに、全て異なる形で現れる。

次に、調査結果[2]であるが、受動動詞+テアル構文の三つのタイプにおいて、位置節を伴う割合や主語となる名詞の特徴、状態変化を強調する表現の使用度などが全て異なる形で現れることがわかった。

<表2> 「受身動詞+テアル」構文における、タイプ別使用の数

タイプ	位置節を伴う場合	状態変化を強調する表現がある場合	合計
タイプA	340例 (340例/501例: 67.9%)	38例 (38例/501例: 7.6%)	501例
タイプB	28例 (28例/76例: 36.9%)	19例 (19例/76例: 25%)	76例
タイプC	6例 (6例/32例:19.8%)	3例 (3例/32例: 9.4%)	32例
合計	374例 (374例/609例: 61.4%)	60例 (60例/609例: 9.8%)	609例

まず、「位置節を伴う場合」から見てみよう。「位置節」というのは、対象が存在している位置が文の上、表示されているか文脈の流れの中で十分予想できることを意味し、各タイプ別に次のような例文が揚げられる。

<Aタイプの例>

- (15) 彼が行った時には大型観光バスが道路脇の駐車場に二台停められてあった。(臼井 基也(著) 男 書籍9 文学 彼岸祥風 臼井基也著 東京図書出版会;星雲社(発売)、2002)

<Bタイプの例>

- (16) 日没の薄明かりの中、彼女の前のテーブルには新聞が広げられてあった。
(クロディーヌ・セール・モンテーユ(著)/ 南 知子(訳) 書籍9 文学 藤原書店、2005)

<Cタイプの例>

- (17) そんなのは、わが国の修道士たちのおかしな解釈ですよ…そんなことは、どこにも言われてありませんのね。(書籍9 文学 世界の文学セレクション36 20 中央公論社、1994)

「Aタイプ」が、<行為の結果もたらされる、ある場所での受動者・対象の存在を描写するタイプの文>を指しているだけあって、「Aタイプ」に位置節を伴う頻度をもっとも多かったことがわかる。興味深いのは「タイプB」の受動動詞+テアル構文も、位置節を伴う形として出現する頻度が多かったということである。普通「タイプB」は、対象の目に見える形での状態変化を描写するため、以下のように、状態変化を表す表現とよく共起するが、実際<表2>を見てもわかるように、状態変化を表す表現を伴う割合(25%)よりも、位置節を伴

う割合(36.9%)がより高く現れていることがわかる。以下、状態変化を強調する表現が用いられる場合の例文を参考として取り上げておく。

<Aタイプの例>

(18) それは真の健康な状態に置かれてあるということも言いうるわけでしょう。

(真鍋 俊照(著) 書籍1 法藏館、2004)

<Bタイプの例>

(19) スプーン曲げというのは柄と首の境界あたりの一番弱そうなところがクニャッと折り曲げられてあるのだろう、と思っていたのだが、実際はそんなナマやさしいものではなかった。(椎名 誠(著) 書籍9 文学 岩波書店、1987)

<Cタイプの例>

(20) 体育、新聞、シネマ等の施設完備し、その住民の半数は内国人で移民同化の途は充分られてあると説明した(今野 敏彦(著)/ 藤崎 康夫(著) 新泉社、1994)

また、<行為の結果もたらされる、受動者・対象の状態が目に見えない形で持続していることを表す>タイプCにも「位置節」が伴われる傾向があり、興味深い。タイプCはそれこそ「対象の状態が目に見えない形で持続している」ことを表す結果相であるため、位置節を伴う割合はごく低いか、あるいはまったくないことが予想される。

しかし、下記例文(21)でも見られるように、目には見えないものの、抽象的な意味合いとしてではあるが「対象」が存在する位置が把握できるか、あるいは文の上現れていることがわかる。

(21) それぞれの時代に、また、それぞれの地域に性にまつわる固有の民俗が営まれてあったことを認めることなしには、……。 (赤坂 憲雄(著) 風の巻 長部日出雄ほか著 講談社、2001)

一方、全体の例文609例のうち、位置節を伴い出現している「受動動詞+テアル」構文の例が61.4%に当たる374例も存在しており、「受動動詞+テアル」構文がある位置での対象となる名詞の存在を表す際に用いられやすいという傾向は十分読み取れる。

特に、ある位置における対象名詞の状態変化の様相及び、ある位置における存在を強調する例文と言え、例文総609例のうち、Aタイプに属する501例全てと、位置節を伴うB

タイプの例文28例、位置節を伴うCタイプの6例、合わせて535例であると言えるが、これを割合にすれば、87.9%にものぼる。すなわち、「受動動詞+テアル」構文の出現様相において、典型的な特徴として指摘できるのはやはり「対象名詞のある位置における状態」を示すことであるのは否めないことであろう。

但し、87.9%を除いた12.1%に属する例文、すなわち、位置節を伴わないB型とC型に当たる例文も確かに存在はしている。これらの例文の場合は、ある位置における対象の状態変化及び存在を強調する例文でもないのに、「受動動詞+テアル」の形として出現している独特な例文であると言える。参考として、以下の例文が挙げられる。

<Bタイプの例>

- (22) 死とは日常と切り離されてあるものではなく、その延長としてあるものだと思う。(砂川啓介(著) 双葉社、2001)

<Cタイプの例>

- (23) 第二節で述べたように、法学の陰気さは、また秩序のもつ保守性と陰気さによって加重されてあることを免れることはできない。(辻義教(著) 星雲社(発売)、2003)

森(2001)では、「~テアル」の「アル」が <存在>として解釈されさえすれば、いずれも「受動動詞+テアル」構文として成立すると主張したが、実際、そのような意味合いがなくても出現は可能であることがわかる。少数ではあるが、これらのタイプの「受動動詞+テアル」構文を出現させた理由については今後、また稿を改めて論じることにした。

次に、「受動動詞+テアル」構文の三つのタイプごとに、主語の位置に据えられる名詞の特徴の違いについてまとめた。以下の<表3>を見られたい。

<表3> 「受動動詞+テアル」構文の三つのタイプにおける主語名詞の性質

	タイプA	タイプB	タイプC	合計
物名詞	493例 (98.4%)	73例 (96.1%)	14例 (4.4%)	580例 (95.2%)
人名詞	2例 (0.39%)	1例 (1.31%)	3例 (9.4%)	6例 (0.99%)
抽象名詞	6例 (1.19%)	2例 (2.6%)	15例 (46.9%)	23例 (3.78%)
合計	501例	76例	32例	609例

<表3>を見ると、実例として用いられている「受動動詞+テアル」構文の主語は、物名詞、人名詞、抽象名詞が全て可能であることがわかった。従来、「能動動詞+テアル」構文のうち、受動構造を持っているA-1型とA-2型の場合、もっぱら物名詞が主語としてしか使われなかったこととはかなりの違いなのである。

すなわち、人や目に見えない抽象名詞の状態変化及び存在の持続を表せることは、「能動動詞+テアル」構文と区別される「受動動詞+テアル」構文ならではの固有な特徴であると言える。

但し、その数値からもわかるように、総609例のうち、人名詞と抽象名詞を主語として取る例文はわずか29例しかない。すなわち、残り95.2%にのぼる580例の主語が物名詞であることを見ても、「受動動詞+テアル」構文の典型的な意味用法は「目に見える物名詞の、あるいは位置における存在や状態変化の持続」を表すことにあることは確かなことである。

3) 「受動動詞+テアル構文」の前後に、結果相表現を伴う文脈の使用は少ない。

上記で、前後文脈に同じ型の結果相表現が繰り返し用いられていることを避けるため、不自然ではあるものの、受動動詞+テアル構文がその代わりに選択され得る可能性についてふれた。実例分析の結果を見ると、結果相表現を伴う形で用いられる例文の数はごく少ないことが確認された。以下の<表4>を見られたい。

<表4> 結果相表現を伴う「受動動詞+テアル構文」

タイプ	結果相表現を伴う形で用いられる場合	合計
タイプA	48例 (48例/501例: 9.6%)	501例
タイプB	10例 (10例/76例=13.2%)	76例
タイプC	6例 (6例/32例 = 18.8%)	32例
合計	64例 (64例/609例: 10.5%)	609例

<表4>を見ると、「受動動詞+テアル」構文総609例のうち、前後に結果相表現を伴う割合がわずか10.5%に過ぎないことがわかる。タイプ別に見ると、タイプCがもっとも多く、その次がタイプB、次がタイプAの順である。それぞれの例文は次のようである。

<Aタイプの例>

- (24) 夫である日野修三宛に、一通は麻沙子宛に書かれていた。修三宛の手紙にはこうしたためられてあった。(宮本輝(著) 新潮社、1992)

<Bタイプの例>

- (25) 無料の電話機が、普通はボックスに直に配線されているのが、そこだけは差し込みが繋がれてあった。だが、問題が一つあった。(佐伯一夫(著)講談社、2001)

<Cタイプの例>

- (26) それはテレパシーなどではなくて、その人の潜在意識の中に蓄積されていたものが熟成されてある発明発案となり、それが表面意識に出てきたものなのだ、という人がいるかも知れません(塚田豪(著) たま出版、2004)

以上のことからすると、「受動動詞+テアル」構文が出現するのは、主に主語となる名詞のある位置における存在及び状態変化の持続を強調することに主な目的があり、特に、「能動動詞+テアル構文」では表せない、人名詞や抽象名詞の状態変化と存在の持続を表せるためであるとまとめられる。

4. まとめ

以上、実例で用いられている「受動動詞+テアル」構文を対象に、その意味用法を三つのタイプに分類し、それぞれどのような出現様相を見せているのかについて考察した。また、その過程で特に、「受動動詞+テアル」構文は、該当位置における存在の意味さえあれば出現するのか、「受動動詞+テアル」構文の出現根拠は、前後文脈の影響があるのではないか」という側面も念頭に置きながら分析を行った。

その結果、実例で見られた「受動動詞+テアル」構文には、次のような出現様相が見られることが確認できた。

- 1) 「受動動詞+テアル」構文は三つのタイプに分けられ、「能動動詞+テアル」構文には存在しない、目に見えない対象名詞の存在及び状態変化の持続を表す用法の「タイプC」が存在している。

- 2) 数的には、タイプAがもっとも多く、その次はタイプB、タイプCの順番である。
- 3) 「受動動詞+テアル」構文は、多くの例文が位置節を伴う形で用いられており、タイプAがもっとも多く、その次はタイプB、タイプCの順番である。
- 4) 「受動動詞+テアル」構文の90%を越える例文が物名詞を主語としており、抽象名詞、人名詞を主語とする場合の順で用いられている。
- 5) 抽象名詞や人名詞を主語の位置に据えられるのは、受動構造の「能動動詞+テアル」構文(A-1, A-2型)には見られない特徴である。すなわち、様々な性質の対象名詞を主語としており、その存在や状態変化の持続を表せるのは、「受動動詞+テアル」構文ならではの独特な特徴であると言える。
- 6) 「受動動詞+テアル」構文の前後に、結果相表現を伴う文脈の使用は少ない。これは言い換えると、「受動動詞+テアル」構文の前後に特定の結果相表現があり、繰り返しを避ける目的で「受動動詞+テアル」構文が用いられているのではないという結論が得られる。

【参考文献】

- 浦木貴和(2006)「テアル構文に関する考察」『日本語・日本文化研究』16、大阪外大日本語講座
- _____ (2010)「テ形節とスケール構造からみたテアル構文の意味分析」『日本語・日本文化研究』20、大阪外大日本語講座
- 呉幸栄(2012)「してある」と「しておく」の接近：《第2「してある」動詞》との対応を中心に日本文学研究(51)、大東文化大学日本文学会
- 神永正史(2008)「テアル構文の動詞構成：存在文との近さから」『筑波日本語研究』13、筑波大学大学院日本語学研究室
- 杉村 泰(1996)「形式と意味の研究-テアル構文の2種類」『日本語教育』91、日本語教育学会
- _____ (2002)「意志性のないテアル構文について」『言語文化論集』第XXV巻、1号
- 齋藤 茂(2009)「テアル構文と対象の格表示」『言語と文明』6、麗澤大学大学院言語教育研究科
- 鈴木泉子(2004)「格交替における意味の関与-テアル構文を足掛かりとして-」『津田塾大学紀要』36
- 張賢善(2010)「~てある」文と「~ておく」文の違いについて：文法構造の観点から」『言語・地域文化研究』16、東京外国語大学大学院
- 益岡隆志(1984)「一てある」構文の文法」『言語研究』86
- _____ (1987)「テアル表現の意味領域」『命題の文法』くろしお出版
- 原沢伊都夫(2005)「テアルの意味分析-意図性の観点から-」『日本語文法』5:1
- 山崎 恵(1992)「結果相の表現に関する一考察—「ている」「てある」「られてある」「られている」—」『富山国際大学紀要』2、富山国際大学
- 安藤節子(2012)「コーパスに見るテアル表現の意味用法と共起動詞日本語教育/学習の観点」『桜美林言語教育論叢』(8)、桜美林大学言語教育研究所
- 副島健作(2009)「シテアル再考-他動性の観点から」『留学生教育』6、琉球大学留学生センター

森 貞(2001)「他動詞受動形+テアル」構文について『福井工業高等専門学校研究紀要』35、福井工業高等専門学校

森田良行(1994)「動詞の意味論的文法研究」明治書院

논문투고일 : 2018년 03월 22일
심사개시일 : 2018년 04월 18일
1차 수정일 : 2018년 05월 08일
2차 수정일 : 2018년 05월 15일
게재확정일 : 2018년 05월 17일

〈要旨〉

結果を表す「受動動詞+テアル」構文の 出現様相の分析
裴銀貞

本研究では、結果相を表す「受動動詞+テアル」構文を対象に、既存と異なる三つの類型分類を試みると同時に、「能動動詞+テアル」構文とは異なる、各タイプごとに見られる出現様相の特徴について考察を行った。

ここではKOTONOHA書きことば均衡コーパスから収集した609例の「受動動詞+テアル」の実例を対象に、出現様相に次のような傾向性が見られることがわかった。

- 1) 「受動動詞+テアル」構文は三つのタイプに分類でき、このうち「能動動詞+テアル」構文には存在しない、目に見えない対象名詞の存在及び、状態変化の持続を表「タイプC」が存在している。
- 2) 数的には、タイプAがもっとも多く、タイプBタイプCの順で出現頻度が少なくなる。
- 3) 「受動動詞+テアル」構文の殆んどは位置節を伴う形で出現しており、位置節を伴う割合はタイプAがもっとも多い。
- 4) 「受動動詞+テアル」構文の90%以上が、物名詞を主語としており、抽象名詞や人を主語とする場合も見られる。
- 5) 抽象名詞や人が主語の位置に据えられるタイプは、受動構造を持つ「能動動詞+テアル」構文の下位タイプには見られない特徴である。すなわち、主語として用いられる対象に、より幅広い名詞が据えられるのも、「受動動詞+テアル」構文ならではの特徴であると言える。
- 6) 「受動動詞+テアル」構文の前後に、結果相表現を伴う傾向は殆んど見られなかった。すなわち、「受動動詞+テアル」構文の前後に登場する、特定の結果相表現の繰り返しを避ける目的で「受動動詞+テアル」構文が選ばれているわけではないことが判明された。

**Analysis of appearance patterns of passive verb +tearu
that indicates the meaning of the resultant**
Bae, Eun-Jeong

In this study, I attempted to classify three types of “passive verb + tearu” phrases as the An expression representing the meaning of the resultant. Also, it was clarified that the usage environment is different for each type. Finally, I tried to clarify the usage characteristics of only “passive verb + tearu”, which is different from existing “active verb + tearu”.

In this study, I analyzed the appearance patterns of 609 examples of “passive verb + tearu” sentences collected from KOTONOHA corpus material.

- 1) The phrase “passive verb + tearu” can be classified into three types, of which there is a unique ‘type C’ that indicates the presence of an invisible subject noun.
- 2) Type A is the most frequent, and Type B and Type C are the least frequently.
- 3) The phrase “passive verb + tearu” is mostly used in conjunction with the position clause, and type A has the highest concordance rate.
- 4) More than 90% of the phrases “passive verb + tearu” take subject nouns as subject, and sometimes they take abstract nouns and people as subjects.
- 5) There was no tendency to use the resultant expression before or after the “passive verb + tearu” syntax.